

## ジュネーブ便り 第2回

IMF本部造船／事務技術職部門担当部長

松崎 寛

# スイスの核・原子力に対する意識と節電対策

まず、はじめに、東北地方太平洋沖地震においてお亡くなりになられた皆様に対し、心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。また、すべての被災者の皆様に對し、心よりお見舞い申し上げます。

東北地方太平洋沖地震関連のニュースは、発生から1ヶ月あまり経過してもなお、このスイス・ジュネーブの地においても連日大きくメディアに取り上げられています。永世中立国として常に核の安全対策を推進し、国内電力の約4割を原子力発電5基に依存しているスイスでは、とりわけ福島第一原発の惨事に高い関心が集まっています。本号においては、スイスの核や原子力に対する意識と、節電に対する取り組みなどについて

て触れてみたいと思います。

### 我が家の地下にも核シェルター

過去にチェルノブイリ原発事故を経験しているヨーロッパ諸国にとっては、福島第一原発のニュースが最大の関心事といっても過言ではありません。日常生活においても、同僚、隣人はもとより、出席した各種会議参加者からも「放射能汚染は大丈夫か？」とよく質問されますし、政治面ではエネルギー政策の見直しについて熱い議論が交わされています。スイスの各種世論調査では1年前、「原発が必要」だとする割合は半数以上をこえていましたが、現在では逆に「原発廃止すべき」が9割近くにのぼっており、ヨーロッパ諸国のな

かでも特に世論が敏感に反応していると思います。

中世時代からヨーロッパ列強による侵略の恐怖に晒されてきたスイス人は、他国に頼らず「自分たちの身は自分たちで守る」、すなわち「永世中立」的な国民性を有しています。東西冷戦時代、どちらのグループにも属さない永世中立国スイスでは、ほぼすべての住居や公共施設に核シェルターが設置され、その人口カバー率は実に100%を超えているといわれています。実際に、我が家のアパートの地下にも普段は各戸の倉庫として使われていますが、全世帯分の核シェルターは、まるで当たり前のようになきちんと存在しています。(写真①、②、③)

また、日本ではあまり知られて



写真①：筆者アパートの玄関ホールには、地下シェルターへの階段がある。(写真左上奥)



写真②: シェルターのドアは、厚い鉄製。また部屋は重厚な鉄筋コンクリートの壁に覆われている。



写真③: 通路の両側に各戸のスペース (現在は物置) がある。広さは4.5畳くらい。

いませんが、スイスでは1年に1度程度は地震が観測されており、100年に1度はマグニチュード6程度、500〜600年に1度はそれ以上の大地震が過去に発生しています。核、原子力発電、チェルノブイリ、そして東北地方太平洋沖地震・福島第一原発とスイス人の国民性との結びつきが、前述の世論調査の結果に反映されたと思います。スイス政府は、古くならた原発5基を2020年までに刷新する計画をたてており、2013年に国民投票で最終決定を行う予定ですが、今回の世論結果をうけて、大幅なエネルギー政策の転換を迫られようとしています。電力の大口輸出入相手国であり、脱原発色を強めるドイツ、そして原発

を堅持したいフランスとの板挟みのなかで、スイスがどのような解決策を見出すのか、今後の国内議論の動向には大変興味深いものがあります。

## 節電とサマータイム

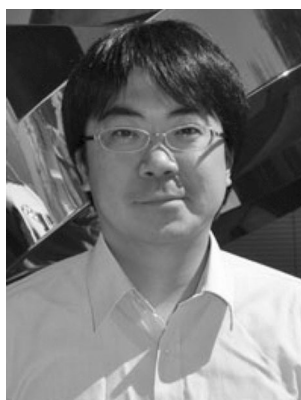
震災後の電力不足により、東北・関東を中心として節電に尽力している組合員と地域社会の皆様にご意を表したいと思います。夏の電力不足はさらに一段と厳しくなるとの報道も拝見しています。少しでも節電に協力できるようなアイデアはないかと考え、こちらで実践している取り組みを紹介したいと思います。

スイスにおいても、地球温暖化防止に対する国民の環境意識は高く、地域コミュニティを中心として節電運動が行われています。IMF本部の事務所は、多くのオフィスビルとアパートが立ち並ぶカルージュという地区に属しており、この地域ではユニークな運動も展開しています。最近の例では、

窓からの光で十分に仕事ができるのに、蛍光灯をつけて無駄な電力を消費していた同僚の部屋の写真が大きくポスターにされ、エレベーターホールや廊下など至るところに張り出されていました。つまり、悪い事例を地域社会に晒し、意識に訴えかける取り組みです。その後、その同僚のみならず、事務所全体が多少なりとも危機感をおぼえ、節電意識が高まったと感じています。また、事務所内部の取り組みとしては、年初よりパソコンスクリーンの待機電力をカットする機器を導入されました。自分でスイッチをオン・オフしなくてはならないのですが、オンにしないと仕事ができないため、自然とそうした行動が身に付くような気がします。

さて最後になりますが、3月27日よりサマータイムが始まりました。この時期、ジュネーブでは、日の出が6時ごろ、日の入りが19時ごろですが、これがサマータイムとなり、日の出が7時ごろ、日の入りが20時ごろとなります。これは夕方の電力ピークをおさえる効果があり、節電に大きな効果を発揮すると思います。私がジュネーブに赴任した頃から、現在と同じような日の出・日の入り時刻の10月ま

でサマータイムでしたが、月平均の電力使用量と料金は、11月〜2月平均とくらべて、無意識のうちにそれぞれ1割近く削減できていました。ちなみに、当地では、熱湯、暖房代は家賃に含まれており、電力とは別扱いです。生活パターンはあまり変化していないため、削減分のほぼ全量が夕方の明るい時間による照明の削減だということと言えます。節電を求められる今こそ、日本でもサマータイムを導入する価値が十分にあると思います。



松崎 寛 まつざき かん

1998年IMF-JICに入局。国際局政策局で主任として産業政策、環境政策の立案をはじめ海外労使紛争防止ツールの作成などに活躍。2010年8月1日から家族同伴でIMF本部に赴任。現在の担当役職は、産業政策・多国籍企業政策グループの造船部門担当部長および事務・技術部門担当部長。